

# 谷森君への献血

文 吉田英人

(Yoshida, Hideto)

工学部第三類教授

谷森博之君は、昭和六十二年に工学部第三類(化学系)へ入学したが、平成七年三月卒業した後に発病し、翌年の平成八年七月三十日に死亡した。十六か月に及ぶ闘病中に多くの同窓生の援助があった。この間の経過を報告して、谷森君へ何度も献血してくれた学生諸君に感謝したい。

平成七年三月下旬 卒業式直後に白血病と診断され、広島市日赤病院(広島市中区)に入院した。

同年四月上旬 広島大学工学部化学工学講座に血小板提供(B型)の依頼があった。

血小板提供、その採取方法とは、血液中の成分である血小板のみを取り出し、患者に移植することである。左右の腕に針を刺し、片方の腕から血液を抜き遠心分離により血小板を取り出し、余った成分をもう一方の腕から体内に戻す方法が採られる。

この際、提供者は六十分から九十分間ベッドに横になったまま動くことはできない。また、抵抗力の弱い患者に提供するわけであるから、提供者は血液検査を受けてその検査に合格していなければならない。合格者のうち、数名が交代で血小板提供を行う。

依頼があった当日、B型の学生が広島日赤病院に検査に行くことになった。後日、さらに数人が検査を受け、合格者のうち次の学生が提供者(ドナー)に選ばれた。

- 空本 祐三(M2) 松村研究室
- 近藤 寿(M1) 浅枝研究室
- 藤本 高志(M1) 飯沢研究室
- 橋口 一(M1) 増岡研究室
- 野一色公二(M1) 松村研究室
- 竹永 史典(学部四年) "
- 平田 匡宣(学部四年) "

(学年は平成七年度時)

いずれも工学部化学工学講座の学生で、この七人は約一年の間、一人当たり約十回ほど、血小板提供を行った。

平成八年六月下旬 骨髄移植の日程が決まる。

骨髄バンク登録者の中で、適合者が見つかり六月二十六日に移植手術を行うことになった。術後の生存率は約三割と言われている。

移植手術後は患者の抵抗力がさらに弱まるため、細菌濃度の低い新鮮な血液が必要となる。そこで、再び検査を行い、よりきれいな血液の持ち主を捜すことになった。検査に合格する割合は三十人中で約六人と言われているが、幸い、先に血小板提供を行っていた者のうち三人が合格した。

しかし、一度血小板を提供した人は、次に提供するまで四日以上あけなくてはならない。したがって、患者に毎日、血小板を提供する場合などを考えて、五人ぐらいのドナーを確保しておく必要があった。

そこで、広島大学全体に呼びかけてドナーを募集することになった。そして、多くの方々に連絡をいただいた。献血が長期間になることを了承してもらった方に検査を受けていただき、新たに三名がドナーになった。

- 稲葉 靖治(M2) 学校教育学部社会学科
- 今津 洋(M1) 理学部数学科
- 沖田 敦美(学部四年) 工学部化学工学講座
- 藤本 高志(M2) "
- 野一色公二(M2) "
- 平田 匡宣(M1) "

○新たなドナー

この六人は、約三か月の間に六、八回の献血を行った。

同年六月二十五日 骨髄移植手術  
同年七月上旬 移植後数日は容態が安定していたが、拒絶反応が現れ始めた。毎日のよ

うに血小板が提供された。

同年七月中旬 拒絶反応があるものの、血小板の提供が一日おきぐらになる。食欲はないが食事をするようになる。回復に向かっているように思えた。

同年七月下旬 拒絶反応により、片方の腎臓に異常が現れた。尿の排出が困難になり、体内に水がたまった。そのため呼吸が困難になったので、人工呼吸器をつけた。拒絶反応はさらに強くなり、肝硬変を起こした。

同年七月三十日 死去

谷森博之君は六十二年度入学生であり(在学八年)、また卒業研究当時所属した研究室は、本人の卒業と同時に研究室の教授が停年退官し、後継者もなく消滅した。すなわちドナーの学生は、同じ化学工学講座であるが、学年も研究室も異なり、本人とは面識もない関係にあった。まして他学部にも所属する二名は、全く本人を知らない。

また、血小板の提供は治療ではなく、延命策にすぎない。一回だけの献血ですむわけではない。日赤病院―東広島キャンパス間の往復の所要時間と採血時間を合わせると、一回の献血に四時間前後を要した。

これらの状況にも拘わらず、長期間しかも卒業論文研究、修士論文研究、あるいは大学院入試準備や就職活動という多忙な期間に、何度も何度も広島市内に向いて献血を行っている。

献血してくれた前記の学生諸君に心から御礼を申し上げる。

